問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

白河院の御時、九重の塔の金物を、牛の皮にて作れりといふこと、世に聞えて、修理したる人、定綱朝臣、ことにあふべき由、聞えたり。仏師なにがしといふもの召して、「たしかに、まこと、そらごとを見て、ありのままに奏せよ」と仰せられければ、承りて、上りけるを、なからのほどより、帰り下りて、涙を流して、色を失ひて、「身のあればこそ、君にも仕へ奉れ。肝心失せて、黒白見分くべき心地も侍らず」といひもやらず、わななきけり。君、聞こしめして、笑はせ給ひて、ことなる沙汰なくて、やみにけり。

かの韋仲将が、凌雲台に上りけむ心地も、かくやありけむとおぼゆ。

時人、いみじきをこのためしにいひけるを、顕隆卿聞きて、「こやつは必ず冥加あるべきものなり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、みづから、をこのものとなれる、やんごとなき思ひはかりなり」とぞほめられける。

まことに久しく君に仕へ奉りて、ことなかりけり。

（「十訓抄」から。）

（注）白河院＝白河天皇。譲位後、院政を開始した。
九重の塔＝今の京都市左京区にあった塔。
定綱朝臣＝藤原定綱。
君＝帝。天皇。ここでは、白河院を指す。
韋仲将＝中国の魏の人。高い塔の凌雲台の額を書けと命じられて、籠に入れられて、七、八
○メートルの高さにつり上げられたが、地上に戻ったときには、恐怖のために白髪になっていたと伝えられている。
顕隆卿＝藤原顕隆。

(ア) ――線1「定綱朝臣、ことにあふべき由、聞えたり。」とあるが、「定綱朝臣」が処罰されそうになった理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 九重の塔は金物で作られたのに、牛の皮で作ったというううわさを「定綱朝臣」が広めたから。
2 九重の塔の金物は牛の皮で作ったというううわさが流れ、「定綱朝臣」がその責任を問われたから。
3 金物が手に入らなかったために、「定綱朝臣」が九重の塔の金物を牛の皮で作ったから。
4 「定綱朝臣」が白河院の命令に従わず、九重の塔の金物を牛の皮で作らなかったから。

(イ) ――線2「肝心失せて、黒白見分くべき心地も侍らず」とあるが、このような様子の「仏師」を筆者はどう見ているか。筆者の見方を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 塔の金物の真偽を調べさせようとした「定綱朝臣」に忠誠を尽くそうとしたものの結局果たせなかった「仏師」を、哀れな人間と見ている。
2 塔から落ちたら「白河院」に仕えることができなくなると訴えた「仏師」は、凌雲台から落下した「韋仲将」の話を知っていたのだろうと推測している。
3 塔が高いことを口実にして塔の上の金物が本物かどうかを確認しなかった「仏師」の考えがわからず、「仏師」の真意をはかりかねている。
4 塔の高さへの恐怖から気力が失せて金物が本物かを確かめられなかった「仏師」を、同様の体験をした中国の「韋仲将」に重ね合わせている。

(ウ) ――線3「顕隆卿聞きて」とあるが、事情を聞いた「顕隆卿」はどのように思ったのか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「定綱朝臣」には責任がないと思った「仏師」は、「韋仲将」にならって高い塔に上り、恐怖で白髪になりながらも「定綱朝臣」の無実を証明したのだ。
2 「定綱朝臣」が処罰されないように、「仏師」は命をかけて塔に上り、金物が牛の皮で作れるはずがないことを証明したので、「定綱朝臣」は危機を脱したのだ。
3 「定綱朝臣」が塔の上で処罰されると聞いた「仏師」は、「定綱朝臣」の命を救うために決死の覚悟で塔に上ったので、「定綱朝臣」に感謝されたのだ。
4 「定綱朝臣」が行ったという不正の真偽を確かめることになった「仏師」は、塔の高さにおびえるふりをすることで「定綱朝臣」の処罰を阻止したのだ。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「仏師」は塔の上の金物が本物かどうか確かめるという役目を果たせなかったが、「顕隆卿」は「仏師」の真意を感じ取って賛嘆した。
2 英雄として知られている中国の「韋仲将」と同様の勇気があるかどうかを試された「仏師」は、恐怖の体験を味わうことになった。
3 「定綱朝臣」の無実を証明できるのは神仏の御加護のある「仏師」だと確信した「顕隆卿」は、「仏師」に塔に上るよう命じた。
4 ぬれぎぬを着せられた「定綱朝臣」を救うために率先して塔に上ろうとした「仏師」は、塔の高さに驚き、途中で下りてしまった。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

陸奥国田村の郷の住人、馬の允なにがしとかやいふをのこ、鷹をつかひけるが、鳥を得ずしてむなしくかへりけるに、赤沼といふ所に、鴛鴦の一つがひゐたりけるを、くるりをもちて射たりければ、あやまたず雄鳥にあたりてけり。その鴛鴦をやがてそこにてとりかひて、餌がらをば餌袋に入れて家にかへりぬ。そのつぎの夜の夢に、いとなまめきたる女のちひさやかなる、枕にきてさめざめと泣きゐたり。あやしくて、「なに人のかくは泣くぞ」と問ひければ、「きのふ赤沼にて、させるあやまりも侍らぬに、[長年の間]としごろのをとこを殺し給へるかなしみにたへずして、参りてうれへ申すなり。この思ひによりてわが身もながらへ侍るまじきなり」とて、一首の歌をとなへて、泣く泣くさりにけり。

日暮るれば誘ひしものを赤沼の真菰がくれのひとり寝ぞうき

あはれにふしぎに思ふほどに、なか一日ありて後、餌がらを見ければ、餌袋に鴛鴦の妻とりの、はしをおのがはしにくひかはして、死にてありけり。これを見て、かの馬の允、やがてもとどりをきりて出家してけり。

（注）陸奥国＝「みちのく」のこと。現在の東北地方東部を指す。
馬の允＝馬に関わる仕事を行う役職の名前。
鴛鴦＝おしどりのこと。雌雄がいつも一緒にいる。
くるり＝水鳥を射るのに使った矢。
真菰＝水辺に生える草。
もとどり＝髪を頭の上で束ねたところ。

（橘成季「古今著聞集」から。）

(ア) ――線1「なに人のかくは泣くぞ」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 いったいなぜそんなに泣いているのだ。
2 なぜ人は泣きたい気持ちを隠せないのか。
3 人前でこれほど泣いているのは誰か。
4 誰も慰めないからそうやって泣き続けるのか。

(イ) ――線2「この思ひ」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自分の夫が誰に射殺されたのかを「馬の允なにがし」から聞き出して恨みを晴らしたいと思っている。
2 自分の夫が何の落ち度もないのに「馬の允なにがし」に射殺されてしまったことをひどく悲しく思っている。
3 自分の夫を射殺したことをどれだけ責めても平然としている「馬の允なにがし」を許せないと思っている。
4 自分の夫がなぜ射殺されなければならなかったのかを説明できずにうろたえる「馬の允なにがし」を哀れに思っている。

(ウ) ――線3「出家してけり。」とあるが、「馬の允なにがし」が出家した理由を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 おしどりの雄鳥を誤って死なせたせいでつがいの雌鳥に恨まれ、夢の中でも責められ続けることが恐ろしかったから。
2 自分よりもおしどりのほうが優れた歌を作れることに衝撃を受け、俗世間から逃げ出したいと思ったから。
3 おしどりの雌鳥の死に接して、夫を思う雌鳥の愛情の深さを知り、雄鳥を射殺した自分の行為を悔やんだから。
4 夢の中で出会った上品な女性にもう一度会えないかと思案を巡らせた末に、神仏の力を借りようと考えたから。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 おしどりの雌鳥が夫を殺さないようにと夢の中で頼んだにもかかわらず、「馬の允なにがし」は雄鳥を射殺してしまった。
2 「馬の允なにがし」に自分の夫を射殺されたおしどりの雌鳥は、夫のあとを追うように雄鳥のそばで死んでいた。
3 つがいのおしどりを手に入れようとして果たせなかった「馬の允なにがし」は、腹いせに雄鳥のほうを射殺してしまった。
4 獲物を捕まえられない鷹に腹を立てた「馬の允なにがし」が鷹に矢を放ったところ、矢はおしどりの雄鳥に当たった。